『境界研究』No. 3（2012）pp. 135-146

［研究ノート］

中ロ国境交渉の今 ── ヘイシャーズ島から考える

岩下 明裕　伊藤 薫

はじめに

中国とロシアが2004年10月に突如、締結した東部国境補足協定により、4,000キロを越える中ロ国境に最後まで残されていた問題の二カ所、チタ州ザバイカルスクと内モンゴル自治区満洲里に近いアルグン河のアバガイト（阿巴該図）島（ロシア名はボリショイ島：約60平方キロメートル）とハバロフスクを臨むアムール河とウスリー河の合流点に位置するヘイシャーズ（黒瞎子）島（ロシア名はボリショイ・ウスリースキー島及びタラバーロフ島：約340平方キロメートル）[1]が「フィフティ・フィフティ」で分け合って解決したことは今ではよく知られている。当時、世界を驚愕させたこのニュースは、中ロ関係が歴史上もっとも良いと評される際のシンボルとなった。

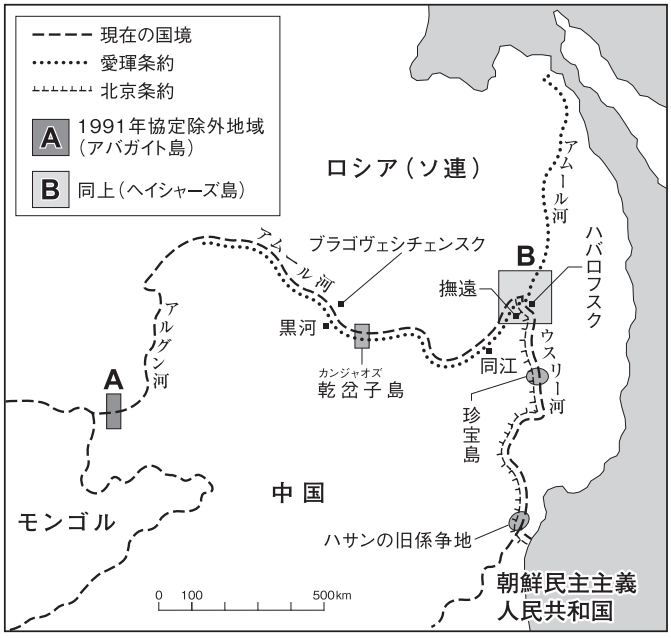

図1 中ロ国境とアバガイト島、ヘイシャーズ島の位置

(1) 正確には、黒瞎子島がボリショイ・ウスリースキー島に対応し、タラバーロフ島は銀龍島と呼ばれる。ただこの両島は一体としてアムール・ウスリーの三角州を形成しており、前者の名称で全体が代表されることが多いため、本稿でもそれに準ずる（なお、黒瞎子とは中国語で小熊の意味）。

2005年6月のウラジオストクでの協定批准書の交換の後、島上での画定作業を経て、2008年7月、北京で両国外相が議定書に調印して(発効は10月)、中ロは「国境画定(delimitation)」、「画定作業(demarcation)」という国境を定める一連のプロセスを完了した。国境画定研究の第一人者であるジョーンズ(Stephen B. Jones)にならえば、中ロ国境はようやく「運用(management)」の本格的な段階へと達したのである[(2)]。

中ロ関係の歴史においては、特にヘイシャーズ島の帰属の最終的解決は極めて重要である。1960年代中葉の最初の国境交渉で中ソがアムール河とウスリー河の国境線を主要航路もしくは(航行できない場合は)中間線とし、これまでソ連側が事実上支配してきた中国沿岸の島嶼を中国に引き渡すことにほぼ合意しかけたときに、これを阻んだのはヘイシャーズ島の処遇であった。この島だけは渡せないとするフルシチョフに、中国側は全面移管を要求したため、交渉は決裂し、これが1969年の珍宝島事件を引き起こす契機となった[(3)]。

1980年代後半の次の国境交渉でも、あやうく同じ事態が繰り返されそうになった。ゴルバチョフは、ヘイシャーズ問題の解決を他のすべての国境画定とパッケージとすることにこだわり、再び交渉には暗雲が立ちこめた。このとき1960年代の経緯を教訓とし、ヘイシャーズ問題を切り離し、他の国境問題を先に解決すべしと強く働きかけたと当時の関係者は証言する[(4)]。その結果、ヘイシャーズ島を「棚上げ」にした1991年中ソ国境東部協定が生まれた。中ロ国境4,300キロの98%がこの協定によって画定されることになった。

だがその直後、ソ連が解体したことで、状況が変わった。協定の批准はかろうじて行われたものの、そこからの具体的な現地での画定作業が遅々として進まなかった。とくにウスリー河上流部から先は陸国境となる沿海地方の作業が問題視された。そこでは数百ヘクタールとはいえ、ソ連が統治していた土地を中国に移管する内容が協定に含まれていたからだ。混乱の極みとなった新生ロシアのなかで、この問題が政治的にリークされ、地方行政府によって扇動されていく。折から国境を越えてロシア極東でビジネス(そのほとんどは担ぎ屋)を行う中国人が急増し、地域は混乱し、現地では「中国脅威論」が高まる。国境画定作業は中断され、国境協定はその履行が危ぶまれた。そのとき、中国への移管につきもっとも問題視されていた(中ロ朝三国国境地帯に近い)ハサン地区300ヘクタールを中ロが分け合って解決することになる。これが中ロ国境問題に「フィフティ・フィフティ」が適用された最初のケースであり、後にこの考え方が、1991年の協定では除外されていた係争ポイントに適用される。

筆者(岩下:以下同じ)は前著『中・ロ国境4000キロ』及びその続編にあたる「中・ロ国境

(2) Martin Pratt, “The Scholar-Practitioner Interface in Boundary Studies,” *Eurasia Border Review* 1 (2010), p. 32.

(3) 岩下明裕『中・ロ国境4000キロ』角川書店、2003年;同「中・ロ国境問題はいかにして解決されたのか?」『法政研究』71巻4号、2005年、597-614頁。特に断りがない場合、中ロ国境交渉の記述はこれら前著に基づく。1964－88年の中ソ国境交渉の全過程に参加し、1995－99年には駐ソ大使としてこれに関わった李鳳林も同様の指摘を行っている。姜長斌『中俄国界東段演変』中央文献出版社、2007年、序文。

(4) Генрих В. Киреев. Россия — Китай. Неизвестные страницы пограничных переговоров. М.: Росспэн, 2006.

問題はいかにして解決されたのか？」で、1997年のハサン問題の解決及び2004年のヘイシャーズ問題の解決に至るプロセスをつぶさに分析した[5]。本稿はその続編にあたり、分割された島嶼の昨今の状況をまとめるとともに、その中ロ関係に与えるインプリケーションを再考しようとするものである。

1. アバガイト島

ヘイシャーズ島の現状に立ち入る前に、同じく1991年協定から除外され、2004年補足協定で解決されたアバガイト島について触れておこう。ヘイシャーズ島と異なり、アバガイト島の問題は新しい。実は1960年代の交渉でこの島を中国は要求しておらず、80年代の交渉で急に持ち出してきてロシア側は驚いたとされる。理由は草原を流れるアルグン河の蛇行が著しく、河の流れが大きく変わり、かつてのチチハル条約(1911年：アルグン河の島に番号をつけ、どの島が中ロどちらに属するか決めている)が現状に適合しなくなったとするのがその理由だ。その中国の新たな要求のうち、アバガイト島(280島)の下流に位置するメンケセリ島(279島)についてロシアは要求を呑んだものの(ただし、中国移管後にロシア人に利用させるという条件がついた)、アバガイト島そのものについてはこれを拒んだ。それは中ロ蒙の三国国境点から100キロほどくだり、国境線が陸から河へと変わる地勢的な起点にこの島があること、島の北側にはロシア人の村があり、鉄道が近くを走るこの一帯が交通の要路にあたることなどがその理由と思われる。

結果として、ヘイシャーズ問題に比べれば比較にならないとはいえ、アバガイト島は中ロ間に残された係争地として協議の対象となっていた。

さて筆者は2004年の補足協定を分析すべく、「中・ロ国境問題の最終決着に関する覚え書」を著し、実際に分け合った係争地がどうなるかについて、次のような整理を行ったことがある[6]。

> 決着以前の係争地は、アバガイト島は4分の3をロシアが実効支配、上流部から中国国境に近い一部(4分の1程度)を中国が実効支配していた。[…] ラブロフ外相が「ロシアにとって取水が大事であり、その場所は残った」と発言している。取水のための最も重要な場所は、上流部に近く、国境警備隊の詰め所もあるアバガイト村近辺だと推測されるため、少なくとも実効支配していた上流部北方はロシアに残ったのではないかと思われる。アルグン河の北の流れにかかわる部分はロシア領となった可能性が高い。分割の内実は、中国側が38平方キロ、ロシア側が24平方キロとされる。

島の面積については、中国側からの聞き取り、支配する島の位置どりは、ロシア側の情

(5) 前注3参照。
(6) 岩下明裕「中・ロ国境問題の最終決着に関する覚え書」『ユーラシア国境政治：ロシア・中国・中央アジア』(21世紀COEプログラム研究報告集8)スラブ研究センター、2005年。

報に基づくが、補足協定第1条にアバガイトに関わる国境線の数値が示されている。これによると、国境点7は河の分岐点(ロシア語条文ではプロヴァ河とアルグン河が分岐する場所、中国語条文でハイラル河と名前のない河が分岐する場所)から始まり、7/1及び7/2が設定され、国境点8へと続く。7/1と7/2について記された数値を、ソ連製20万分の1地図やグーグル・マップなどを参考にマッピングすると図2のようになる。

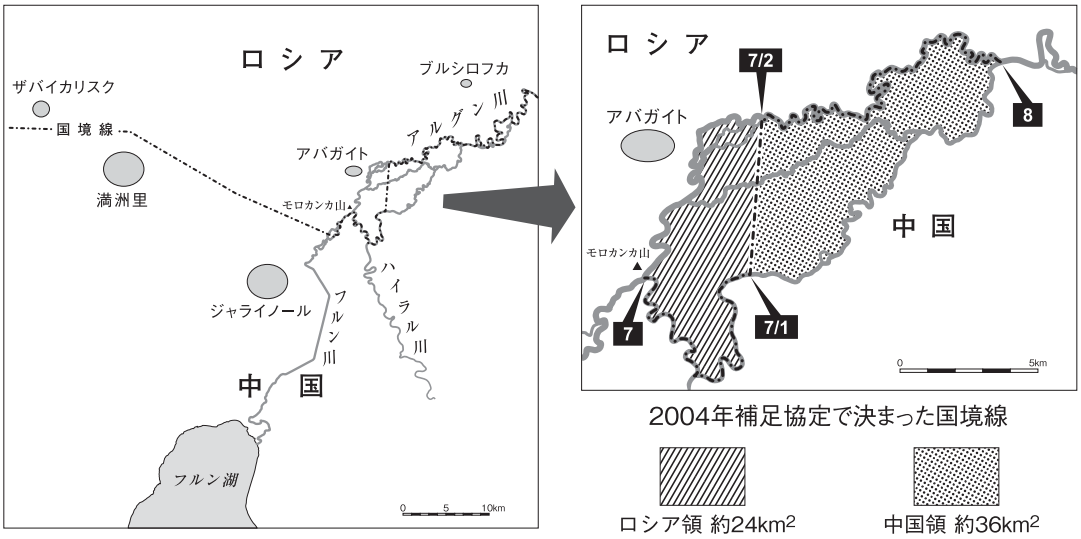

図2 アバガイト島概略図

この地図をみれば、取水のための上流部一帯がロシアに残り、下流部が中国へ移管されたことになり、また面積的にもほぼ聞き取り情報と一致する。ロシア側にとって面積的にはすくないものの、河と陸の国境の結節点とアバガイト村の周辺を確保したことで、この決着は十分に「フィフティ・フィフティ」に値すると考えたのだろう。もとより、アルグン河流域の国境は(メンケセリもそうであったが)草原と沼地であり、とくに開発に資するような場所ではない。アバガイト村のロシア人はこれまで通りに日常生活を営み、それを対岸から中国の国境警備隊が監視するという状況は大きく変化してないと思われる。

2. ヘイシャーズ島

ヘイシャーズ島については、少なくとも1929年の中東鉄道事件以後、ロシア(ソ連)が実効支配してきたことはよく知られている。またハバロフスクに近い島の東部にはロシア人も暮らしており、島の中央部の方にかけてコルホーズがあることも有名だ。このあたりまでは外国人でも立ち入ることが可能であり、夏には艀が対面のオシノヴァヤ・レチカから往来したり、浮き橋がかけられたりしていた。

さて先の「覚え書」のなかでヘイシャーズ島については以下のように整理しておいた。

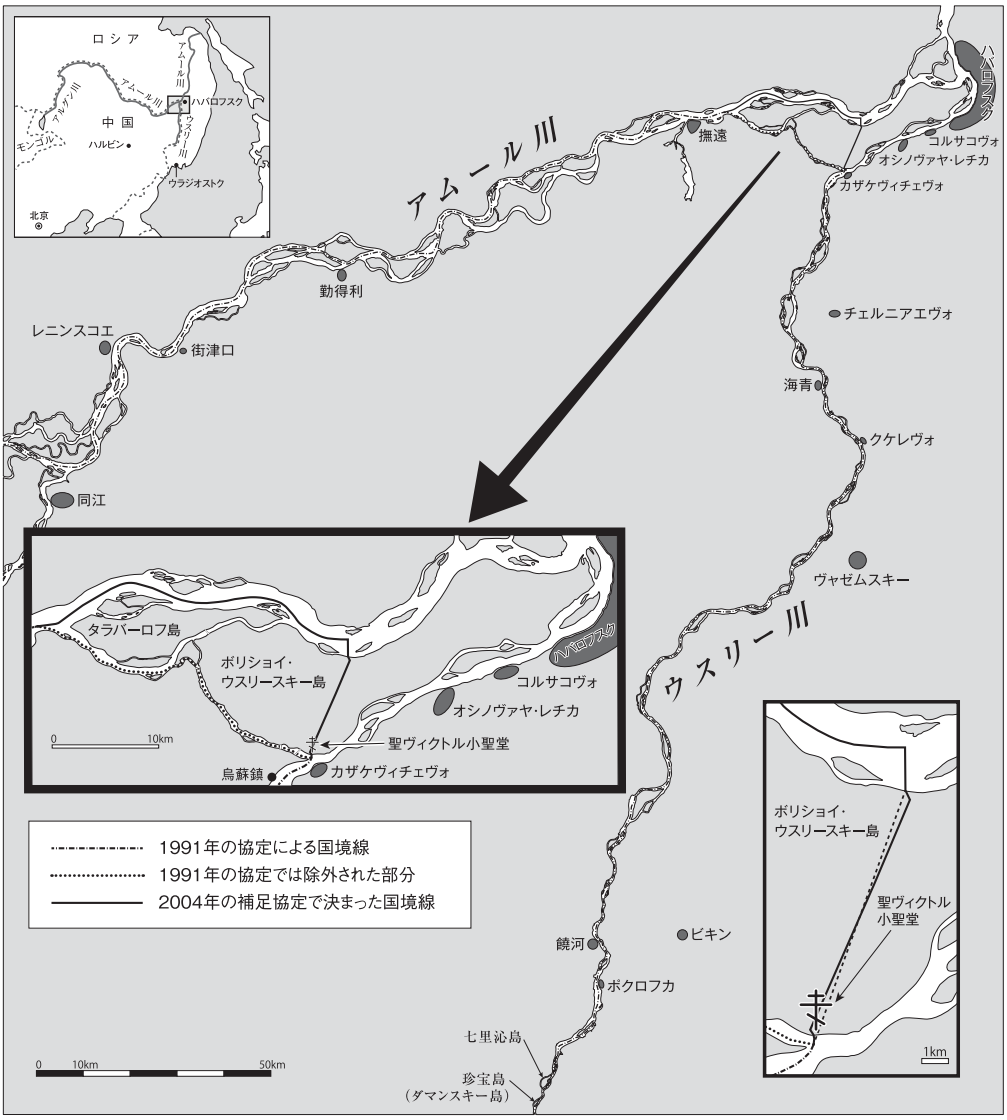

図3 ヘイシャーズ島概略図

ヘイシャーズ島は、中国側に171平方キロが移管され、ロシアに164平方キロが残る。ヘイシャーズ島のうち、ロシアが強く要求していたカザケヴィチェヴォ村にのぞむ教会、コルホーズ、ダーチャ、軍施設などがあるボリショイ・ウスリースキー島の東半分がロシアに残る。タラバーロフ島とボリショイ・ウスリースキー島の西半分は中国へ移管。

2004年の補足協定第1条によれば、国境点10を起点に10/1から10/6までが設定されている。主要航路もしくは中間をとる河川国境と異なり、陸に設定される国境は直線でつくられるため、線の角度が変わる箇所が条文に細かく現れる。各国境点の数値とソ連製20万分の1地図及びグーグル・マップを参考に、マッピングすると図3のようになる。

図3右下の囲み図をみてほしい。アムール河からウスリー河へ直線を引けば点線のようになるのだが、実際には不自然に直線がずらして設定されている。この線のずれのある区域のほとんどに中ロ双方が争点とするべきものは何もない。あるとすれば、それはただ一つ、島とウスリーの河口の接触点にあるロシアの教会の存在である。かつて係争が焦点になった頃、闇にまぎれて十字架を引き抜きにくる中国人に対抗してロシア側がつくったといわれる教会(ヴィクトル聖堂)こそロシア側が固執した場所である。明らかにこの聖堂をロシア側に残すために、この線は引かれたものと思われる(図3右囲みの点線と実線のズレを参照)。

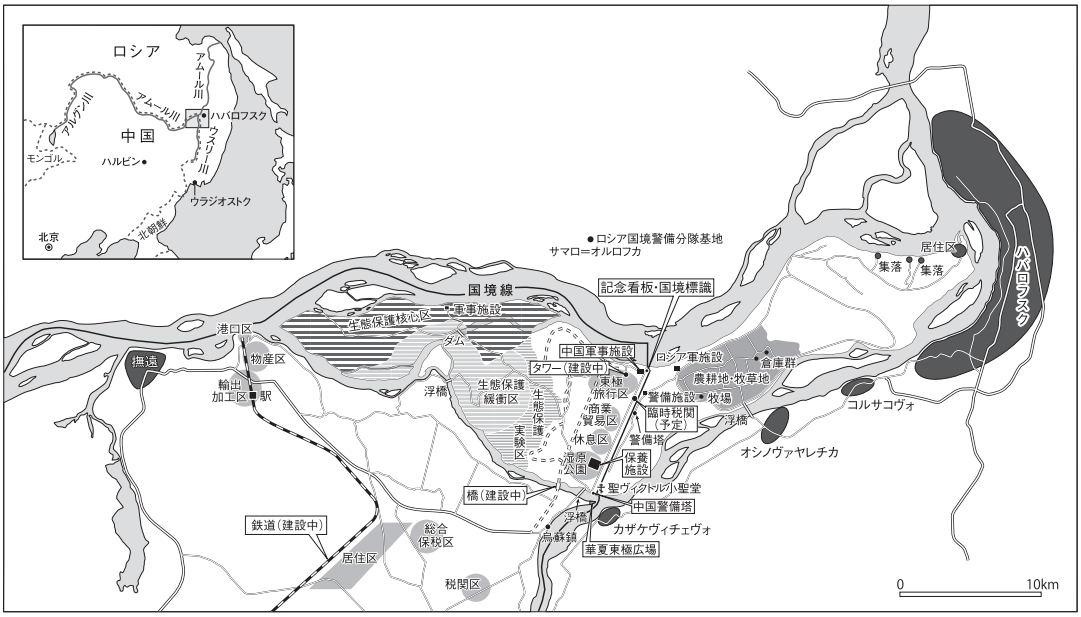

図4 ヘイシャーズ島の現状および将来図

協定議定書に調印がなされた2008年7月、ヘイシャーズ島に新たに設置された国境線の中国側でセレモニーが行われた(図4の記念看板箇所)。以後、中国側はロシア側と協議を行いながらも、自身の管轄部分についての開発に着手する。中ロ双方共に歩調をあわせて開発を行い、ヘイシャーズ島を「一島両国」のスローガンのもと、相互に簡単に往来できるような仕組みをつくりたいとする。ロシア側も公的には島の積極的利用に前向きな姿勢を表明している。

だが現実は少し違うようだ。ロシア側が中国と同じペースで島を開発するのは難しく、自らのペースで行うとトーンダウンする一方で、中国側の開発は急ピッチで進む。図4はロシアと中国双方の現地情報をもとにマッピングした島の現状と将来図である[(7)]。

(7) 現状に関する分析は、『黒龍江日報』、『黒龍江経済報』、«Тихоокеанская звезда»を始めとする地元紙及び現地地図などをもとに行った(2012年3月末現在)。インターネットなどの最新情報によれば、2012年秋から島への橋も鉄道駅も運用開始とされている。

中国の計画は、ヘイシャーズ西方の部分を自然保護区として残し、逆に国境沿いに貿易区、自然公園、観光区などを設け、タワーと橋の建設を予定している。このうち建物のいくつかはすでに出来ており、橋もまもなく完成する。現在は、ロシアのカザケヴィチェヴォ村とウスリー河を挟んで向き合う烏蘇鎮(鎮とあるが、実際には小さな停船場と国境警備隊監視塔及び関連施設のみ)から島へとかけられた軍用浮き橋でのみ往来でき、この橋を使って作業が進められている。このルートを使って、2011年夏、観光客がヘイシャーズ島に上陸を初めて許され、中国側はこの島が自国領であること、近い将来、観光名所とすることを内外にアピールした。だが観光は島だけではない。島を臨む烏蘇とカザケヴチェヴォの間、まさにロシアに残されたヴィクトル聖堂をにらむように(中国の最東端を意味する)「東」のシンボルが立つ公園もまぶしい。

注目すべき点は、島の周囲の開発に対する中国の視線である。すでに島の近くを経由して撫遠の街へと向かう鉄道の敷設が終わっている。これはハルビンから佳木斯を経由して前方鎮までの鉄路を延長したものだ。駅舎はまだオープンしていないが、完成間近だ。駅から近いアムール河の河口に港を整備する計画もある。クレーンもすでに設置されている。数年前なら撫遠港からアムール河経由で日本海へと結ぶ物流ルートを強化する計画の一つとみなされよう。だがこの地域は工業区でなく輸出する製品がなく、また穀物などの輸出は近年、制限される傾向にあるため、この港が国際海運の拠点になるのは難しいと現地の識者は言う。保税区をつくる計画もあるが、国務院の許可も容易ではな

い。港には中国石化の看板があり、将来的に石油の備蓄基地でもつくるのだろうか。この港の将来像はよくわからない。

一般的にみて、ヘイシャーズ島引き渡し後のこの光景は、これまで様々な中ロ国境地帯で繰り返されてきたシーンと重なる。例えば、綏芬河や東寧で中国側が急速な開発と発展をみせる一方で、ロシア側の国境地域が遅々として進まない様相だ。ヘイシャーズ島の近未来もそのようにみえる。撫遠には鉄道のみならず、空港もまもなく開港する。そうすれば、中国の最東端やヘイシャーズ島へ中国各地から観光客が訪れるだろう。彼らはロシアから引き渡された島の自然を十分に堪能するだろう。他方で、ロシア側はここに誰が訪れるのだろうか。そもそも国境地域をオープンにして観光地化するといった発想をもたないロシア人だが、この島の半分は「失われた領土」である。ここに保有地ができたとしても、また自由に中国側が管轄する部分に入境できるようになったとしても、モスクワやペテルブルグからわざわざ観光に来るとは思えない。そもそもロシア側にはニーズがないといえる。

ロシア側が中国側と協力したいのは、物流の構築であり、ロシア側には島まで鉄道を引く計画もあるという。しかし、わざわざヘイシャーズ島を経由する理由はどこにもない。撫遠や建設中の新しい港から直接、ハバロフスクに入り沿海地方へ鉄道輸送するか、あるいは河を下ってコムソモールスカヤ・ナ・アムールに出ればよい。しかし、前述したように、ここから中国が出す物流があるかどうかも今は疑問視されている。いずれにせよ、中国とロシアの島への認識と関与は対照的である。

3. 歴史認識と国境問題の隘路

ヘイシャーズ島に関する中ロの意識のずれは表象のなかにもあらわれている。かつて筆者は『中・ロ国境4000キロ』のロシア語版をモスクワで出版したことがあるが[8]、出版の条件がロシア人研究者による序文をつけることであった。出版の労をとってくれたモスクワ国際関係大学のアレクセイ・ヴォスクレセンスキー (Alexei D. Voskressenski) が序文の執筆にあたってくれたが、その序文は数十頁にも及ぶものとなった。そこで彼は筆者の分析に

(8) Акихиро Ивасита. 4000 километров проблем: российско-китайская граница. М.: Восток-Запад, 2006.

ついて評価を与えつつも、いくつか批判を行った。そのなかの中心的なものが、いわゆる愛琿条約、北京条約についての筆者の見方、つまり、これを「不平等条約」とするものであった。ロシアの研究者はいまだにこれらの条約を「不平等条約」だとみなすことはない。筆者はここで「中国よりの見方」と断定された。興味深いのは、これを読んだ黒龍江省社会科学院シベリア研究所長(当時)の宿豊林が、ヴォスクレセンスキーの批判に反応し、筆者の見方は「正しい」と擁護したことだ。いわば、中ロ間の歴史認識のずれの大きさが露わになり、双方共に筆者の分析の大部分を無視して、この一点で議論を繰り広げることとなった[(9)]。

ヘイシャーズ島をめぐっても同様の事態が繰り返されている。ロシアの中国専門家ユーリー・ガレノヴィチ(Iurii Galenovich)は最近、中ロ関係の資料・論文集全四巻を刊行したが、その最後にこの2004年協定とヘイシャーズ島の問題について論じている。その中で彼は元ロシア大使、李鳳林について10頁にわたり非難を続けている。ガレノヴィチは、『世界知識』[(10)]に寄せられた李の文章を逐一引用しながら、ロシアが島を(半分とは言え)中国に引き渡したことをあたかも「中国の勝利」「ロシアが過去の支配を過ちと認めた」と吹聴しているように解釈し、これは中ロ関係を損なう重大な行為とまでみなす。ガレノヴィチによれば、ロシアが中国に島を渡したのは、過去に対する反省ではなく、あくまで未来にむけた友好を考慮した善意の証である。ロシアは中国に謝るべき過去などないとし、李のような発言が関係に傷を与えると厳しく論難する[(11)]。その後、批判は同じく「特集」で引用された、中ソ国境問題の大家である姜長斌や中国社会科学院辺疆史地研究センターの李国強にも向けられる。四巻本のなかではいささかバランスを欠いた分量と内容であり、それゆえ、ロシア側の感情が露わになっており、筆者はかつて自分が受けた批判の再現をみるような思いであった。

ところで不平等条約をめぐる議論だが、中国側はかねてよりロシア側に押し付けられたとして強い不満を表明しつつも、冷静な見方も示している。例えば、姜長斌はその著作『中俄国界東段演変』(中ロ東部国境の変遷)のなかで、同条約は中ロ両国の力が極めて不釣り合いな状況下で、中国が望んだわけではなかったとはいえ、結局は両国の合法政府が調印し、国際法上、拘束力を有しており、中国政府はずっと承認してきた、と述べている[(12)]。

(9) 宿豊林「国境をめぐる中ロ関係：歴史と未来」『第22回日ロ極東学術交流会報告書』2007年、大阪。中国とロシアのどちらに紛争の責任があるか、についての激しいやりとりが珍宝(ダマンスキー)島事件をめぐって、ウクライナの研究者と中国学の泰斗の間で繰り広げられたこともある。ネヴィル・マクスウェル(Neville Maxwell)とドミトリ・リャブシュキン(Dmitri Ryabushkin)の議論については、Akihiro Iwashita, ed., *Eagar Eyes Fixed on Eurasia,* vol. 2: *Russia and its Eastern Edge* (Sapporo: Slavic Research Center, 2006)を参照。

(10) 王博「黒瞎子島回帰記」『世界知識』2008年、21号、46-54頁。

(11) Юрий Галенович. История взаимоотношений России и Китая: книга IV: Две нации — три партнера (1991 г. - начало XXI в.). М.: Русская панорама, 2011.

(12) 姜長斌『中俄国界東段演変』(前注3参照)、352頁。

いずれにせよ、この中ロの歴史認識論争が示唆するのは、国境問題が解決しても歴史問題は残る。逆にいえば、歴史問題があっても国境問題は解決しうるという事実である。日中、日韓、日ロなど領土をめぐる言説はしばしば歴史認識問題の捕囚となっており、歴史問題が解決しなければ国境問題も進まないように議論されるが、中ロのケースはこれを反駁する最良の機会となる。翻って、歴史問題を解決するために、「島を譲る」という類の議論(竹島問題でしばしばこれが語られる)の限界も明らかとなろう。「島を譲る」行為そのものが、相手から「過ち」を認めたものと主張されかねず、歴史論争は領土問題の存在にかかわらず、いつまでも続くと思われる。

おわりに——中ロ関係のテストとしての国境の島

中ロ関係については、中ロは同盟を組んで米国などと対抗する、あるいは逆に中ロ関係は不倶戴天の間柄で(表向き友好はつくろっていても)内心は相互に「脅威感」をもち、いずれ破綻する、の二つの極端な考え方の間で言説が往来している、と著者は『中・ロ国境4000キロ』のなかで指摘した。

中ロ国境地域の現実、つまり、紛争と衝突からそれを乗り越えて問題を解決するまでの一連のプロセスが明らかになるにつれて、中ロ関係の深さと広がりは多くの第三者に理解されるようになった。冒頭で述べたような極端な立論は以前に比べれば米国でも日本でも沈静化している。にもかかわらず、この両論はいまだに亡霊のように言説のなかで再生産され続けている。

参照文献(とくに中国語資料)の不十分さから日本ではあまり誰も注目しないが、ボーボ・ロー (Bobo Lo)の『便宜上の枢軸：モスクワ、北京、新地政学』は、ワシントンで刊行された直後、一部でかなり話題になった著作である[(13)]。しかしながら、中ロ関係がいずれ戦略的な緊張に向かうというストーリーづくりには米国のなかでも現地事情に詳しい識者から疑義が表明されており、筆者もこの著作が(中国もロシアも重要視している)国境問題をほとんどフォローせずに関係性を外在的にスケッチしたにとどまっている点を鑑み、あまり評価しない。実際、欧米の一部の論者間での論議を除けば、筆者自身、この著作についての積極的な評価を少なくとも中ロ関係を専門とするロシア人や中国人研究者から聞いたことはない(より率直にいえば、著作が話題になったことさえほとんどない)。

しかし他方で、この著作が刊行された当時、米国のなかでは、例えば上海協力機構を中ロを軸にした「反米同盟」のようにみなす言説が流布していたため、中ロの矛盾を強調するローの著作は、その解毒剤として有効だと私は考えて支持した。中ロ関係の難しさを多面的に分析したという意味において、本書の意義は大きい。

(13) Bobo Lo, *Axis of Convenience: Moscow, Beijing, and the New Geopolitics* (Brookings Institution: Washington, D.C.), 2008.

だが、もし論議の趣旨が中ロ関係の難しさをプレイアップする方向に利用されるのであれば、そしてそれが日本で流布するようであれば、そのような見方には釘を刺す必要がある。中ロ関係は歴史上、もっとも安定している。過去の中ロ関係の内実を知っていれば、この評価が妥当なことは誰でもわかる。より重要な点は、相互の深い不信は、国境問題の解決も含む、ここ数十年の関係構築でかなりの程度、緩和されたこと、そして中ロ双方共に過去に時計の針を戻すような事態は避けたいことだろう。

実際、1990年代と2000年以降の中ロ関係は質的に異なっている。前者は混乱と無秩序、国境や移民の問題で相互に制御が難しい状況が生まれていたのに対し、移民管理・国境問題の調整をへて「中ソ友好協力条約」を締結し、国境問題を最終的に解決し、昨今800億ドルのレベルまで貿易量を伸ばし、エネルギー協力などに邁進してきた中ロ関係はそれなりに安定している(14)。どこにピークがあるかはともかく、この関係が一挙に崩れる兆候はどこにもない。言説レベルで、ロシア側から「(強大化する)中国への不安」が聞こえてきたとしても、この20年間の成果と現実を見つめながら、言説を評価すべきであろう。

反中国的な言説を政治的に使おうとするロシア人研究者は昔から少なくなかった。中国人移民研究のゲリブラス(Vilia Gel'bras)は中国の行動をすべて不信とともに言説化する専門家として有名であり、チタレンコ(Mikhail Titarenko)のように中国人には「いい顔」をしつつ、インド人や日本人の前では対中批判を繰り返す二面性を使い分ける研究者もいた。近年でも、日本や米国に対しては対中脅威の言辞を用いつつ、中国に対して対米・対日批判を繰り返す識者は少なからずいる。これら一部の識者の主張を鵜呑みにすれば、ボーボ・ローの著作のように、中ロはいま「戦略的緊張」を高めつつあるということになろう。だが他方で、ルキン(Aleksandr Lukin)やバジャノフ(Evgenii Bazhanov)ら対中国関係の安定を前提にロシア外交を語る議論や「中国人との議論の方が(欧米の識者との論議に比べて)はるかに率直でオープンだ」と評するカラガノフ(Sergei Karaganov)率いるバルダイ・クラブ(ロシア・中国セクション)のような見方も忘れてはならない。

筆者の結論をいえば、中国とロシアの間の溝を強調しすぎる見方は一種のプレイアップか、そうあってほしいという希望に過ぎず、ロシアにとっての中国は精々「ニュアンス」ある存在とみなすのが正鵠だろう。

移ろいやすい無責任な言説を相対化するためにも、中ロ国境地帯の動向をウォッチすることは不可欠なものと筆者は考える。「フィフティ・フィフティ」で島をわけあって解決されたヘイシャーズ島の現状と近未来はまさにそのテストとさえみなせよう。「ニュアンス」ある存在としての中国が今後、どのようにロシアに受け止められていくか、注意深く観察

(14) 日本では、中ロ関係の現状について冷静でバランスのとれた分析が数多く現れている。例えば、山添博史「ロシアの安全保障分野における対中関係：リスク回避と実益の追求」『ロシア・東欧研究』40号、2011年、79-90頁。

しよう。ヘイシャーズ島の開発と利用の現状をみるかぎり、中ロの協力は紙の上に留まっており、現実には中国側の突出した発展のみが目につく。一見、中ロ関係に「緊張」が生まれつつあるようにもみえるが、それはあくまで島を分け合って解決したという事実の上に見られる現象だ。両国ともにそのギャップについて十分に自覚している。筆者が最近訊ねた中国ハルビンのロシア専門家の言葉が響く。「我々はロシア人の気持ちを理解する。ヘイシャーズ島の開発はもっとゆっくりやるべきだ。急いではならない」。彼らの提言は中国の地方政府に確かに届いている。

(付記)本稿を準備するにあたり、岩下の現地調査や資料分析に基づき、伊藤が地理・空間情報を整理し地図を製作した。また記述全体に対しては、岩下がその責を負う。